

福島区歴史研究会 会報

第四号

2015.2

目次

阪神・淡路大震災―二十年前の事	1
福島区内の旧蔵屋敷について	5
福島区の建築物 1 塩野義製菓中央研究所	10
塩野義製菓中央研究所と	
大日本製菓海老江工場の見学会	14
『ふれあい祭り』ミニパネル展示・森本棟夫・荻田善彦	16
松下幸之助翁生誕百二十年記念講演会	17
下半期の事業	20
下半期の活動記録	20



阪神・淡路大震災―二十年前の事

太田 勝義

平成七年一月十七日、午前五時四十六分。

突然、ドカンという音が鳴った。我家にダンプカーが突っ込んで来たのかと思った。

イヤ違う。我家は大正六年築の木造二階建て。寝室は昔からの、つり電灯なので猛烈に揺れている。テレビが倒れている。これは今まで経験した事のない大地震である。

どこが震源地か分からないが相当な被害が出ていると直感。揺れが大きいので布団から出られず、このままペチャンコになっても仕方ないと覚悟し、布団の中へもぐり込んだ。

静まり、台所へ行ってみると、水屋は傾き、神棚はひっくり返り、家の中は食器や置物が散乱し素足で歩くのが危険な状態。家が倒れなかったのが幸いと表へ出て見ると、瓦がずり落ち、二階の外土壁が畳二枚分、地面にバツサリと落ちて歩行の邪魔をしている。

これでは大阪市内は相当被害が出ているのではないかとテレビを付けると、神戸方面が震源地で被害が相当出ている。早速、自転車に乗り区内を見て回ると、地域差があるものの概して西方面がひどい。

死者は全市で一四名を数えたが、当区で唯一死亡された方があった。大開町のマンションの最上階の老婦人で、ダンスが倒

れ、その下敷きになって圧死されたのであるが、後日、大阪市は死亡された方に弔慰金五〇〇万円を支給するとしたが、当初、死亡原因が地震によるものかどうか疑いがあると、話が進展しなかった。現地を訪ねお話を伺うと、死亡時間と救急車到着時間とが合致し、隊員が現認しているという事が判明した。

大開地区の家屋被害が一番大きかった。明治の古地図を見ると沼地が多く、地盤が弱い事が判る。野田阪神駅前、三井住友銀行から西へ五〇〇mに亘り、かなりの被害が出ていた。

一軒、木造建が一m陥没し、隣の鉄筋のビルにもたれた形でビルがなければボタンと倒れそう。大阪市は当該建物は半壊と判定した。全壊と半壊の差は、手直しすれば住む事が可能かどうかにかかっているというが、家の方は承知出来ず、私も到底無理だと思った。大阪市は後日全壊と判定した。

半壊と損壊の区別もややこしく、あちこちで揉めた。瓦や壁等の被害状況で判定するのであるが、税法上の優遇処置、行政側の対応、金融機関の融資等、かなりの差が出てくるところから、相談が多くあった。福島区役所は他区と比べて住民の声をよく聞いてくれたと思う。福島区は戦前から長屋が多く、被害は思ったより深刻であった。長屋だから持ちこたえたのである。一戸建なら多く倒れていたと思われる。相談で一番多かったのが瓦のズレで、ビニールシートの要望であった。一月の寒さと雨降りが多くて、どの家も求めたが役所には枚数に限度がある。後日、ホームセンターでも買い求める事が出来たが、福

島区は数千枚という数によったであろうか、幸い地元の工務店さんがかかなりの枚数を用意して下さった。

福島区は半壊が一五八世帯に上ったのは、瓦がずり落ちて屋根の役目を果たしていない事が証明されたからである。建物は長屋だから持ちこたえたが、屋根の被害が莫大であった。この事は雑誌『大阪消防 平成七年一〇月号』五四頁〜五七頁 阪神・淡路大震災による大阪市内の建物被害について」大阪府立大学 土井幸平教授の検証に詳しく記載されている。

水道の給水管の断水被害は全市で五、三〇〇ヶ所。一月二五日までに復旧。下水道は五下水処理場、三抽水所が漏水したが、応急処置で一月二六日まで復旧。

最も困った事は、水道は給水タンク車やポットでカバー出来たが、下水処理場が漏水した事で、便所が使えなかった事である。大阪府浄化槽協同組合と大阪市管工設備協同組合、相方の顧問をしていたので、大阪市からの依頼もあって、移動便所とポットの大量貸出のお手伝いさせていただいた。

大阪市は住まいの不自由な方、交通がままならない方に福島区民センターを開放した。その中で海老江の一家族の方から、子どもがよちよち歩きなので、大ホールでは皆様に迷惑がかかるし、本人も寝れないので何とかしてほしいと要望があった。二階の和室の使用を願って許しをいただいて、大変喜ばれた。

反対に苦労したのは、仮設住宅である。大阪市は大開四丁目のは今は阪神高速道路淀川左岸線となっている高見公園(仮称)用

地に他市の方々にプレハブの仮設住宅を建設した。約四〇棟位建っていたと思うが、その代表格の人から電話がかかってきて、色々要望が出てきているので聞いて欲しいと言う。こちらには私一人で、先方は二〇人位いた。「大阪市会議員なら何とかせよ！」と大阪市に注文された。震災で困っておられるので、出来るだけの事をしたいと、市に要望をしますと返事するのだが、中には詰め寄る方があった。最後に私は「この住宅は大阪市が好意で無償で何もかもしてますのやで。出来るだけの事はしますが、後はそれぞれの地元の市長さんや議員さんに言うてくれませんか。」と言うと、代表の方が納めて下さった。

私が大阪市と最も議論を交わしたのは、震度であった。当日、気象庁の発表では、大阪市の震度は四であった。神戸・淡路の七は分かるが、京都、彦根、豊岡が五で、大阪が四で一ランク低い。四は他には高知、呉、鳥取、福井、奈良、津、四日市等で見られるが、いずれも大阪市より被害が少ない。全壊、半壊、液状化現象、淀川堤防破損と、どこから見ても五である。訂正すべきであると大阪市長に迫った。これは上町台地の岩盤の堅い所で測ったからであろう。此花区、西淀川区、淀川区、福島区、港区、大正区は明らかに五である。

大阪市の測定地点が一ヶ所である事に無理がある。これ以降、各区に一ヶ所測定する事になった。私が五にこだわるのは、五であれば「震災動員非常招集」の指示を大阪市長から出さなければならぬ。すると、市職員全員の総動員と対応が出来る、

即ち大阪市の非常事態宣言の発令が可能であったという事である。一分一秒が大事なのであった。

最後に大阪市消防署員の手記が多数あり、少し紹介する。

◎福島署勤務中二四才。はしご車と救助車がぶつかり合うように揺れていた。建物が潰れると思い、机にしがみついていただけだった。

◎西署四二才。城東区の一四階建の一二階の自宅マンションが倒壊して死ぬと思った。

◎西淀川署五七才。「アッ」と瞬間激しい横揺れがあり、仮眠ベッドの支柱に三〇秒しがみついたままであった。



被災した福島天満宮（福島一丁目）の鳥居奉建の碑

資料編 地震の概要

発生 平成7年1月17日 火曜日 午前5時46分52秒

淡路島北部を震源とするマグニチュード7.2 震度 最高7

兵庫県南部地震と命名。別途 阪神・淡路大震災と称す

死者・行方不明者 5,504名 負傷者 41,517名

建 物	全 壊	半壊・損壊	火 災
大阪市	194棟 247世帯	2,131棟 3,093世帯	16件
福島区	2棟 2世帯	119棟 158世帯	1件

死傷者	死 者	重 傷	軽 傷
大阪市	14名	4名	353名
福島区	1名		

水 道	断 水	排水管の漏水	給水管の漏水
大阪市	1,912戸	285ヶ所	5,300ヶ所

下水道	漏水等		つまり
大阪市	下水処理場5ヶ所	抽水所3ヶ所	
福島区	海老江下水処理場他	北港抽水所他	大開地区他25ヶ所

道路河川	陥没57ヶ所、隆起90ヶ所、ひび割れ129ヶ所、その他285ヶ所 液状化現象多数
公園	靱、中之島、中之島西、天保山他
港湾	防潮堤、保留、道路、緑地、荷役等 計176件
市営住宅	断水、ひび割れ、排水等 計980件
危険物施設	消防法に基づく危険物施設、タンク、給油所等 計247件



福島区内の旧蔵屋敷について 岡倉 光男

蔵屋敷とは江戸時代、幕府、諸大名が年貢や国産物を販売する為に設けた倉庫兼取引所。ここで換金した現金が国許に送金され、大きな財源となる。また西国大名の参勤交代時に藩主や藩士が滞在することもあり、経済・金融機能のほか、政治・文化的な機能ももっていた。江戸・大津・敦賀・長崎などに置かれたが、商業、金融の中心地であった大坂が最も多く、幕末の天保年間（一八三〇～四四）には一二五の蔵屋敷を、その機能を停止した明治初年には、百三十五を数えた。

大坂に蔵屋敷が開設されたのは、豊臣時代の天正年間（一五七三～九二）に加賀の金沢（前田）藩が大名屋敷を置き、兵糧米を備蓄・販売したことが始まりと言われているが、細川・宇喜多・蜂須賀・毛利の各藩なども大坂城の周囲に大名屋敷を置き、経済活動もしていた。その後、本格的には、大坂夏の陣以降の江戸時代に入って、荒廃した大坂の町の復興が進められ、元和五年（一六一九）には有力商人であった淀屋常安によって中之島を開発、他の大小諸侯も、当時競って大坂に屋敷を持ち、蔵屋敷

を設けるようになった。その位置は、中之島が最も多く、土佐堀川、江戸堀川、天満、その他海部堀川、立売堀川、長堀川、備前島大川南岸等、いずれも川沿いの船便運輸の便利な所に設けられた。

元禄期（一六八八～一七〇四）に入ると諸国からの大坂廻米や国産物（「蔵物」という）が増加するにしたがい、蔵屋敷の蔵元としての業務を藩の役人から町人蔵元に切り換え、蔵屋敷の財政を管理する掛屋（注1）の体制が着々と整備された。明暦年間（一六五五～五八）の二十五カ所の蔵屋敷は、元禄十六年（一七〇三）には、市内とその周辺で九十五カ所に増えていた。その時の当地（現在の福島区）所在の蔵屋敷は、次の通りである。

（藩名）	（在所）	（知行高）	（蔵屋敷所在）	（現在地）
松山	備中	六五〇〇〇石	堂島新地五丁目	福島一丁目
福山	備後	一〇〇〇〇〇石	堂島新地五丁目	福島一丁目
人吉	肥後	二二〇〇〇石	堂島新地五丁目	福島二丁目
臼杵	豊後	五〇〇〇〇石	堂島新地五丁目	福島二丁目

天保十四年（一八四三）市中の蔵屋敷は一二五カ所となった。その時の当地所在蔵屋敷は次の通りであった。

(藩名)	(在所)	(知行高)	(蔵屋敷所在)	(現在地)
長岡	越後	七四〇〇〇石	梅田橋南詰	福島一丁目
広島(上田主水)	安芸	一七〇〇〇石	田蓑橋北詰	福島一丁目
名古屋	尾張	六一九五〇〇石	堂島五丁目	福島一丁目
秋田	出羽	二〇五八〇〇石	堂島五丁目	福島一丁目
久留米	筑後	二二〇〇〇〇石	堂島裏町	福島一丁目
延岡	日向	七〇〇〇〇石	堂島五丁目	福島一丁目
中津	豊前	一〇〇〇〇〇石	堂島五丁目	福島一丁目
富山	越中	一〇〇〇〇〇石	玉江橋北詰	福島一丁目
人吉	肥後	二二二〇〇石	玉江橋北詰	福島二丁目
臼杵	豊後	五〇〇六〇石	玉江橋北詰	福島二丁目
壬生	下野	三〇〇〇〇石	下福島村	玉川三丁目

右は『大阪市史』(注2)によって作成したものである。「堂島裏町」「玉江橋北詰」は、堂島五丁目に含まれる。なお、壬生藩の蔵屋敷所在地は文久三年(一八六三)春刊、浪華書肆版の「改正増補国宝大坂全図」によった。

文化三年(一八〇六)刊の「増修改正摂州大阪地図」によると曾根崎川(蜷川)沿い、上福島村下砂町に「中国米入」、同村汐津橋北詰に「加州米入」。下福島村しもの下の天神社東側に「筑前米入」

と書かれた三カ所の米入蔵屋敷が記載されている。

このうち「筑前米入」の蔵屋敷と思われる石碑が、昭和六三(一九八八)年五月、玉川一丁目四番五号、下福島幼稚園北東横の、下水道埋設工事現場で発掘された。この場所は、昭和初期に埋められ道路になったが、往時は、堂島川北側の河川敷を利用した流作場を横切って支流、玉川が北へ流れていた。浜をつなぐ耕作橋を潜って、(間に明治時代には、小さな木橋があった)次の生涯橋の傍で、石碑は、高さ八十六糎、幅約十八糎、奥行き十五糎の花崗岩製、表面に「筑前手蔵屋鋪地 宝暦五亥七月」と銘が刻まれ、西暦一七五五年に、手蔵屋敷が同地にあったことを裏付ける貴重な遺品である。「地」とあるのは、石碑の立っていた場所は、小舟から荷揚げした蔵米等を、一時置いておく為の更地で、当時は「はえ場」と呼ばれた。国許から運ばれてくる年貢米の米俵は、海上輸送の途中で、湿気を含むので、直ぐには米蔵には収納されず、数日間、外で乾燥させる。その際、米俵は山状に積み上げられ、上から苦てまがかけられる。これを「はえ(搥)」という。手蔵屋敷が、そのごく近くにあったことを語っている。

この場合の「手」は、主要本邸を支えるの意で、本邸があつ

た筑前福岡藩五二万石余の蔵屋敷跡は、現在中之島三丁目の三井ビルと、中之島ダイビルになつていて、その長屋門は後藤又兵衛不明門という伝説があり、庶民救済に尽した義侠人、木津勘助が門の屋根に上がったとも伝える。今は天王寺美術館の南側に移築され、往時の蔵屋敷を偲ぶ数少ない遺構となっている。

なお出土した「筑前手蔵屋舗地」の石碑現物は、福島図書館郷土資料展示室に常時展示されている。

天明六年（一七八六）の



『大坂武鑑』に、備中新見藩一万八〇〇〇石の蔵屋敷が堂島小橋西、堂島新船町（合羽島ともいう）にあつたと記されており、文化十一年（一八一四）の『大坂袖鑑』に、同所が鍋島支藩、肥前鹿島藩二万石の蔵屋敷となり、さらに天保六年（一八三五）の『大坂袖鑑』では、鹿島藩はなく、筑前福岡藩の蔵屋敷となっている。先の「筑前米入」とはごく近くであるが、福岡藩は、堂島新船町に下（中）蔵屋敷か、手蔵屋舗を増やしたと思われる。

なお、『大阪府誌』第一編によると、延享四年（一七四七）に伊

勢桑名藩一〇万石、美濃加納藩六万五〇〇〇石の蔵屋敷が、堂島新地五丁目（現在の福島一・二丁目付近）にあつたと記されている。また、寛延（一七四八〜五一）ごろ発刊の「摂州大坂画図」には、福江藩とも呼ばれる肥前五島藩一万二六〇〇石の蔵屋敷が下福島村にあつたとあり、その書き込まれている場所は、船津橋北詰西側で、現在の野田一丁目、大阪市中央卸売市場本場、表入口付近の安治川沿いの所である（8ページ地図の①、寛延につづく宝暦の地図）。

一九九八年夏、堂島地区（現ほたるまち）発掘調査の際、窯跡が見つかった。窯跡南側の玉江橋寄りに、福沢諭吉生誕の地碑が示すように、幕末には九州の中津藩の蔵屋敷がこの地であり、それ以前には、他藩の蔵屋敷が何度も入れ替わって置かれていた。

享保元年（一七一六）、この一帯の蔵屋敷は、大火で完全に焼失した。火災の前には大村藩・唐津藩・松山藩・人吉藩といった蔵屋敷のあつたことが、当時の絵図から分かる。発掘の結果、その火災の跡を片付け、再び蔵屋敷として整備していった様子が明らかになった。また、ここに居住した人達の使用した様々な日常品や玩具も見つかり、当時の生活振りを教えてくれる。

例えば、日用品雑器以外に、「涼炉」(注3)の原型を保った物があり、武士仲間で御点前の煎茶が嗜まれたことが分かる。また子供の遊び玩具では、土人形・ままごと道具・面子類・土鈴・独楽などがあつた。

発掘調査の際、ごみ穴(土壙)からスッポンの甲羅(肋骨板)や骨が多数出土し甲羅を復元すると、九つを数えた。甲羅には、包丁の料理傷が残り、骨も裁断されていて、食べられたことが分かる。記録では現在のスッポン料理の普及は一七世紀の大坂からとされ、それを裏付ける貴重な資料の出土となつた。

慶応四年(一八六八)五月、中央集権化を図つた明治新政府は、それまで西日本で使われていた通貨の銀目(丁銀・豆板銀)を廃止、美濃(岐阜県南部)以東の日本海側を除く東日本で通用していた金貨幣制度に、全国を統一する政策をとつた。

明治二年(一八六九)版籍奉還。同四年(一八七二)七月、廃藩置県。続いて十二月には、蔵屋敷の廃止。同五年に藩債処分、株仲間を解散廃止。これら一連の布令が、特に大阪商人に経済的大打撃となり上方経済は急速に衰退した。



宝暦期の蔵屋敷所在

『摂州大坂画図』

宝暦9年(1759) 野村長兵衛板より

- ① 五島藩 (肥前)
- ② 臼杵藩 (豊前)
- ③ 人吉藩 (肥後)
- ④ 中津藩 (豊後)
- ⑤ 加納藩 (美濃)
- ⑥ 広島藩家中 (安芸)
- ⑦ 高田藩 (越後)



(付記)

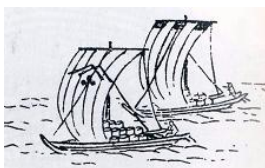
江戸時代、一八世紀の大坂が「天下の台所」と称される全国経済の中心地で、当時物流の殆んどが、北前船・菱垣廻船・樽廻船等による水運によってもたらされていた。

安治川上流に架かる、元禄十一年(一六九八)架橋の初代安治川橋(中央卸売市場業務管理棟前の少し上流)の下流側周辺は、汐の干満を利用して「出船千艘・入船千艘」と称えられ、大坂の玄関口として木津川を凌いで大いに賑わっていた。

幕末、大阪三郷の内、天満組の西寄り川沿いの現福島区内に在った蔵屋敷数は、市中全体の約一割であるが、西は長崎県五島列島から、東は秋田県に及んでいる。

なお、市中蔵屋敷数について、公家・寺社・旗本・小藩・支藩・支所などの分を入れると六百近い蔵屋敷があったとする説もある。

下福島村にあった「壬生藩蔵屋敷」の国許(栃木県内)大名は、慶応年間(一八六五〜八)の「徳川幕府諸侯格式表」には、「下野 城主 鳥居丹波守」とあり明治一八年に子爵に叙せられている。一大消費地の江戸が近いのにもかかわらず大坂にも蔵屋敷があつて藩の経済を支えていた。その敷地は町人から借りていたかも知れず、在任の御留守居役の名前も不明で、明治初年国許に帰国されたと思われるが、その後、下福島一丁目に先代が滋賀県出身の「鳥居」姓の方が、広い敷地に住んで居られた。長く中央卸売市場内で、手広く乾物卸商を営まれていて、先年住まいを西区に変わられた。姓は、偶然の一致かも知れないが、その昔、壬生藩主、鳥居忠英は正徳二年(一七一二)以前は、近江水口藩主であつた。名君で殖産奨励し、前任の近江(滋賀県)から干瓢の栽培を持ち込んだ。現在、栃木県南部は全国の干瓢生産の八割を占めている。何か所縁浅からずの感がある。



(注1) 掛屋 江戸時代、幕府や大名の蔵屋敷に出入りをして、

蔵物処分、売却代銀の出納、送金を扱い、金銭の融通や両替などに当った御用商人。

(注2) 『大阪市史』明治四四年発行、大阪市参事会編附図説明による。

(注3) 涼炉 煎茶道で使用する、小型化した携帯湯沸し器「焜炉」「茶炉」「風炉」ともいわれ、仕組は七輪と全く同じである。

参考文献

『大阪府全志』巻之二 大正十一年 著作兼発行者 井上正雄

『福島区史』平成五年発行。(財)大阪都市協会編

『大阪の歴史力』二〇〇〇年発行。(社)農山漁村文化協会

『中之島誌』(復刻版)昭和四九年発行。中之島尋常小学校創立

六十五周年・同幼稚園創立五十周年・記念会編

『葦火』七十九号 平成十一年四月発行。(財)大阪都市協会編

『浪花まちめぐり・蔵屋敷』平成一八年三月発行。大阪歴史博物館

【クイズ】

(こたえは17ページ)

次の藩の特長的な取扱蔵物(蔵屋敷を通じて販売される品)は何だったでしょうか。イ〜トの中から選んでください。

- 1 広島藩
 - 2 福山藩
 - 3 人吉藩
 - 4 壬生藩
 - 5 秋田藩
 - 6 桑名藩
 - 7 五島藩
- イ 海産物干物 ロ 干瓢 ハ 紅花 ニ 畳表
ホ 木綿 ヘ 椎茸 ト 焼蛤

福島区の建築物 1

塩野義製菓中央研究所

山口 達也

福島区で建築的に知っていただきたい建築物をこの歴史研究会の会報で紹介したいと考えていたが、最初に選んだ建築物が、昨年末から解体の始まった塩野義製菓中央研究所本館(鷺洲五丁目一二 以下本館)であるというのはなんと皮肉なスタートとなった。建築物には寿命があり、鉄筋コンクリート造の事務所研究用途となる建築物は、法定耐用年数で五〇年とされている。

本館が建設されたのは一九六一年であるため、今年五四歳であり、法的にはもう既に減価償却が終わっていたのであるが、その建築デザインや戦後のオフィスデザインを考える上で大きな足跡を残した建築物のひとつであったことは間違いなく、経済的理由のみでこういった建築物が解体されてしまうのは大変残念な出来事である。本稿では、本館の建築的な意義について、検証することで、今後の区内の建築物を再考する礎とすることを目的にする。その前に、少しだけ戦後の建築物の保存について、私自身の考え方をまとめておきたい。

戦後の建築物の保存について

明治大正昭和初期までの建築物については、それなりの評価があり、保存対象になったりするが、戦後の建築物については、保存対象にもならず、また民間の建築物である場合は保存運動も起こらないまま、消え去っているのが現状である。民間の建築物であっても、住民にとってはひとつの象徴であったものが、単なる経済的な論理のみで喪失してしまうことを、文化歴史的な観点からどう捉えればよいのか。そのことで、何を得て何を失っていくのか。これが私の歴史研究会でのテーマのひとつである。前置きが長くなったが、取り壊されてしまう研究所について解説しよう。

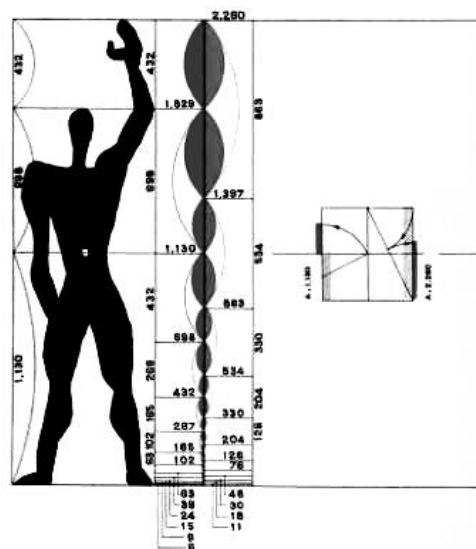
坂倉準三建築研究所

私たちが取り壊し前に見学した塩野義製菓研究所本館の建築設計を担当したのは、坂倉準三建築研究所であり、施工は竹中工務店である。また設計者は、当時の坂倉準三建築研究所の大坂事務所代表である西澤文隆（一九一五〜八六）となっている。坂倉準三（一九〇一〜六九）は、鉄ガラスコンクリートという近代的な素材を用いた世界的な建築家であるル・コルビジェ

に師事した数少ない日本人である。ル・コルビジェについては、建築を学んでいない方でも一九二三年の著作「建築をめざして」の中の「住宅は住むための機械である」という言葉を聞いたことがあるであろう。

コルビジェの計画理論のひとつに「モデュールの考え方」という建築物を扱う上での原則がある。当時から熱狂的なコルビジェ信奉者の間で盛んに使われた原則であるが、モデュールを活かした建築物で国内に現存する建築物は意外に少ない。

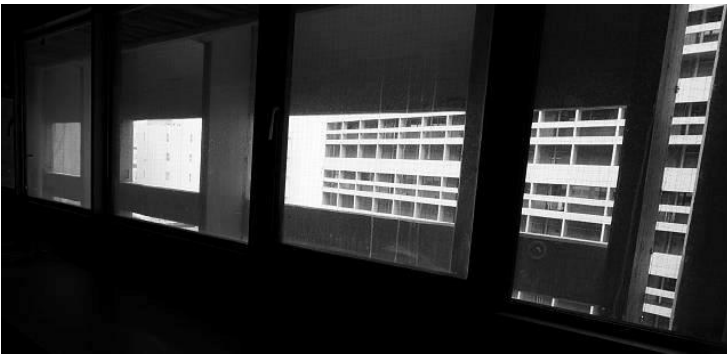
コルビジェの元で働いていた坂倉準三は、数少ないモデュールの体現者であり、その意匠センスを共有する西澤文隆が設計に臨んだ建築物が、この本館なのである。



本館の特徴

わずかに開いた棟構成を感じるように配置計画されている。左右対称（シンメトリー）に計画することで研究所としての威厳を保ちつつ、わずかに開くことで冷たい表情から少し動きのあるデザインとしている。

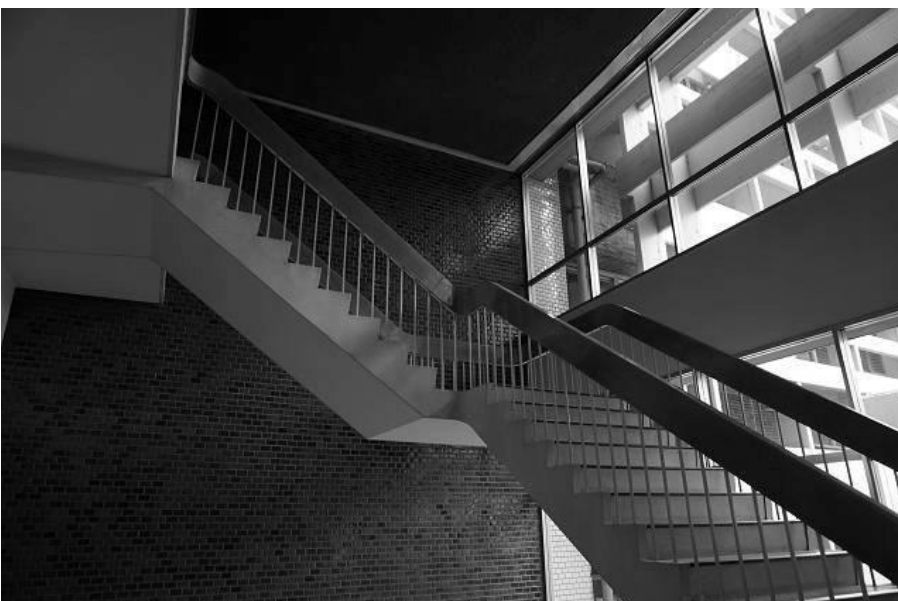
外観には、先述のモデュロールを用いてデザインされたブリーズソレイユ（遮光するための日除け）が建築物の外皮のように設置されている。研究所という機能を考え、日除けを通じて、柔らかい光が窓から入るようになっていく。また内部から観ると、このブリーズソレイユの存在感が、研究所を利用する人々の心理的な共有感を高める役割をしていたと思われる。



本稿ではカラーでお見せできないのが残念であるが、研究所であるにも関わらず、南側の壁は美しいブルータイルで印象づけられ、またエントランスホールでは、天井が朱一色でまとめ上げられており、これらもコルビジェの系譜を感じさせるデザインとなっている。大胆さと繊細さがバランス良く計画されている好例であろう。

一九六〇年代は、中央研究所ブームの年代といわれており、その中であって、つい最近まで現役の研究所として機能していたのは驚愕に値するといわれている。

まず、使い勝手にこだわった平面計画が挙げられる。利用者の要望に応えたその平面計画があつて



こそこの研究所であるが、通常はどのようなようにでも使えるようにということでも細かく間仕切らずに計画することが多い。しかし、この本館では、様々な室が用意されており、大変驚いた。

また研究所として機能し続けた大きな理由は、設備スペースの確保であろう。この当時の建築物としては、この本館は、非常に階高が大きい。ダクトスペースや配管するスペースの確保を可能とした階高設定は先見の明があったと言えるであろう。

写真が悪くてわかりにくいのであるが、戸棚や間仕切りのパーティションについても、細やかにデザインされている。

現在では、本館程度の規模の建築物であれば、なかなか戸棚の取っ手まですでにデザインすることはコストの上でも工期の上でも難しい。当時のデザイン環境がうらやましくもある。



再び建築物の前景、門構えに戻ろう。外塀は、コンクリートで小槌で叩いた叩き仕上げとし、その上に盛土して芝生を植えているが、これは庭園にも造詣の深かった西澤文隆ならではのデザインとなっていた。簡素ながら、印象に残るデザインは素晴らしい。



まとめ

またひとつ福島区は重要な近代建築を失うこととなった。特に東京オリンピック、大阪万博あたりに施工された建築物は、保存修景の対象とならず、法定耐用年数に届いているため、まだ使えるのに取り壊される事になっていくであろう。それは時代の宿命なので仕方ないとしても、この土地が持っていた記憶をどう残していけばいいのか。それらを積み上げていくまちづくりはないのか。それらの方法を模索していかねばならないと感じている。

この跡地にはマンションが建つ。今はこの記憶を留めつつ、この地に新たな文化が構築されていくことを願うのみである。



塩野義製薬中央研究所と

大日本製薬海老江工場の見学会

事務局長 末廣 訂

去る十二月四日（木）、年末から解体される予定の、歴史があり、地元に親しまれた二つの製薬会社の研究所・工場の解体前建物の見学会を、関係者にも呼び掛けて行った。

当日は朝から小雨降る寒い日であったが、会員外を含む二十一名の見学者が午前十時に塩野義研究所（鷺洲五丁目一二）の通用門前に集まった。

両社の跡地がマンションやショッピングセンターとして再開発されると耳にしているが、どちらも由緒ある建物だけに、消え去るのは一抹の寂しさがある。

塩野義製薬は、地元海老江出身の塩野義三郎氏が二十四歳の時、明治十一（一八七八）年三月に道修町で薬種問屋を開業され、今年（二〇一四年）で百三十六年の老舗企業である。

明治四十三年に、今は跡形もないが、現在の阪神電車・淀川駅の北側に塩野製薬所として中津運河に沿って工場が建てられ、隣の島田硝子工場と注射液剤（アンプル）を共同で作っていた。

現研究所がある場所は塩野家とゆかりのあった土地で、当時

敷地内に稲田があり、梅雨どきカエルの鳴き声が聞こえる大正十年に浦江試験所ができたと『シオノギ百年』史に載っている。

現在の研究所は、当時建築費十六億円をかけ、地下一階、地上七階（三十一メートル）の高層ビルとして昭和三十六年七月に完成して、塩野義の研究部門を集約して、中央研究所となった。

この研究所が取り壊され、二年後にはこの敷地に八〇〇余所帯の大型マンション五棟が建つといわれている。

一方、大日本製薬海老江工場（海老江一丁目五）は昔からマルPという名称で親しまれ、海老江のシンボリックな工場であった。

この製薬会社は、従来の和漢薬から当時の田邊、武田、小西、塩野義等の有力製薬家二十一人が中心となり、洋薬の製造を指して明治三十年（一八九七）に大日本製薬の母体となる大阪製薬として設立された。

そして、明治三十二年には海老江の現場所に「海老江工場」を開設し、我国最初の洋薬製造工場として稼働を始めている。

Ⓟという名前は英語の *pharmacy* の頭文字を日の丸で囲み、製薬界への飛躍を表すマークとして親しまれてきた。

また、ライト兄弟と争った飛行機野郎として知られている「二宮忠八」もこの会社の役員として活躍している。

両社の建物は年末から取り壊し工事がはじまるが、せめて、
Ⓟ工場内に建っている煉瓦造りの「記念館」や旧北大阪線沿い

の「煉瓦塀」は風情ある記念モニュメントとして残してもらいたいものである。



塩野義製薬中央研究所



大日本製薬創業五拾周年



塩野義製薬浦江工場



大日本製薬記念館

福島地区 く異世代交流イベントく

『ふれあい祭り』ミニパネル展示

森本棟夫 荻田善彦

一一〇月十二日（日）福島小学校にて毎年秋に開催される、ふれあい祭り（福島地区活動協議会主催）に福島区歴史研究会のパネル展示を初出展しました。

このお祭りは、食と遊びを通じ子供から大人まで楽しめるイベントです、校庭での喫茶を始めとして講堂、教室にて全八団体及び福島警察署の防犯PRと多彩なお祭りです。

福島区歴史研究会のパネル展示は、福島図書館と区役所で開催していますが、福島地区は区の東端に在りすこし遠方、気軽には行けないとの声があり、今回は出張展示です。

福島地区の資料パネルは、史跡・祭礼・文化財・寺社等全六十枚程有るが、今回は初めての事であり子供達が楽しく見られるように、祭り・地域の変遷・日頃目にする史跡・現在は無いお寺など二十枚の掲示を計画しました。

当日は台風の影響が心配であったがその速度遅く、思いがけず晴天となり、校庭の中央出入り口寄りに二枚のボード出展のところ、予想以上に大人も子供も興味しんしん、子供達は「あつ地車の太鼓だ」「獅子舞や」との声、又大人からは特に国道二号線福島西通交差点、北東歩道に案内標はあるものの行けば石

碑の一つも無い、「五百羅漢（妙徳寺）」や「曾根崎川」の質問が多くありました。

アンケートでも身近な歴史が楽しいと好評で、無事終了しました。

今回はボードの手作から始め、少々苦労もあり、又区役所に展示準備の最中に福島地区部分のみ待つてもらおう事となり、関係者の方々にご迷惑もおかけしたが、来年も出来るかぎり参加し、地元の歴史を知ってもらい、この地は『ふるさと福島』と感じてもらえればとの想いです。





当会顧問長山雅一氏が
 第四九回大阪市市民表彰
 (文化功労) を受けられ
 ました。
 おめでとうございます。
 二〇一四年一月

『創立三十周年記念誌なにわ福島
 ものがたり 増補版』を一二月に
 発刊しました。ご希望の方は事務
 局まで(林書店でも販売していま
 す)。

頒布価格一三〇〇円

会員の原稿を
 募集します！



10
 ページの
 クイズのこたえ

- 1 広島藩(ホ 木綿)
 ・「安芸木綿」として有名
- 2 福山藩(ニ 畳表)
- 3 人吉藩(ハ 椎茸)
- 4 壬生藩(ロ 干瓢)
- 5 秋田藩(ハ 紅花)
- 6 桑名藩(ト 焼蛤)
- 7 五島藩(イ 海産物干物)

松下幸之助翁生誕百二十年記念講演会

事務局 末廣 訂

今年平成二六年は福島区と大変ゆかりの深い松下幸之助翁
 (明治二七年十一月生まれ)の生誕百二十年の記念すべき年で、
 福島区歴史研究会として生誕百二十年の記念講演会を開催した
 ところ、四百名近い来場者があり、盛大に終えることができた。
 関係各位のご支援ご協力に厚くお礼申し上げます。

この記念講演会を開催することを決めたのは春先であったが、
 幸い、記念講演会の講師が元松下電器産業社長の谷井昭雄氏に
 決まったのは、松下幸之助翁が「関西商工」に通っていた現在の
 関西大倉の理事長をされた関係で、快く引き受けていただいた。
 た。

講演日を十一月十五日(土) 福島区民センター大ホールに決
 めて、市立下福島中学校の吹奏楽部にも特別出演してもらう快
 諾も得て、準備に入った。

講演会は福島区役所・福島図書館と当会主催で開催すること
 が決まり、チラシ・ポスターの印刷、区の広報誌掲載や大手新
 聞社へのPR記事掲載等を手分けして準備した(大阪日日・朝
 日・産経・読売新聞に催し情報掲載)。

また、当日の来場者に渡す記念品の準備ではパナソニック社
 やPHP研究所から提供を受け、我々の会報や講師紹介の新聞

記事も一緒に袋詰めができた。

講演日の当日は朝から会員が手分けして区民ホールの会場設営や受付、自転車整理、そして吹奏楽の楽器を会員のトラック二台で学校と会場まで往復してもらうなど、準備作業の上、来場者をお迎えできた。

講演会では、谷井氏は幸之助翁との直接の上司・部下の秘話や幸之助創業者の事業経営者としての厳しい話を披露され、講演後に大開幼稚園児二人より花束贈呈があり、微笑ましいシーンで舞台を盛り上げてくれた。

そして、下福島中学校の吹奏楽演奏も大変好評で、盛大のうちに記念講演会を終えることができた。

その後、控室で松下OBの方と谷井講師との懇談の場をもつていただき、我々会員とは近くの中華店で懇親会を開催し、最後まで席を温めていただいた。

その席で谷井氏は各テーブルをまわり、会員一人一人に講演会開催のお礼を言われ、また、生誕一二五年には、自分が元氣なら話をしたいが、半分はその時の現役の社長にしてもらうので是非呼んでほしいと再会を約束していただいた。

そして、パナソニック社から多額の賛助金をいただいた。

当日会場でアンケートを回収した中に「枯れ葉踏み 偉人の声を 聞こえたり（大開公園にて）」という俳句や「松下幸之助の創業の地に住んで誇りに思う」というコメント等もあった。

この講演会を盛り立てるため、福島図書館と区役所一階ロビ

ーで「松下幸之助特別展」を開催し、PHP研究所から特集号の雑誌の提供を受け紹介した。

季刊誌「大阪春秋」の編集委員から春号に四頁の紙面を開けるので記念講演会の記事を載せないかとメールがあり、区長、会長の挨拶と谷井氏の原稿起こしを会員にお願いして校正中で春の発刊が楽しみである。

記念講演会の企画・準備に皆様のご尽力をいただいたが、努力の成果があったとよろこんでいる。



講演会 アンケート結果 (回収 238)

(項目により複数回答・無回答がある)

●どちらから来られましたか

福島区 156 吉野 32 大開 24 鷺洲 22 海老江 15 野田 18 福島 15 玉川 8
大阪市(福島区以外) 29 北区 8 此花区 3 淀川区 3 西区 2 城東区 2 東淀川区 2
都島区 2 大正区 1 鶴見区 1 天王寺区 1 浪速区 1 西成区 1 東成区 1
大阪府 34 豊市中 5 東大阪市 5 枚方市 5 寝屋川市 3 吹田市 3 箕面市 2
茨木市 2 守口市 1 高槻市 1 大東市 1 羽曳野市 1 河内長野市 1
池田市 1 岸和田市 1 門真市 1 交野市 1

大阪府以外 19

兵庫県 11 伊丹 1 西宮 5 芦屋市 1 神戸市 3 尼崎市 1
京都府 5 京都市 2 木津川市 1 大山崎町 1 精華町 1
奈良県 3 奈良市 3

●この講演会は何で知られましたか

新聞・テレビ 36 朝日 読売 産経 大阪日日 広報ふくしま
チラシ 72
ポスター 19
知人に勧められて 110
その他 5 会社の掲示板 会社広報 HP いちようネット

●どのような催しに興味をお持ちですか

講演会 153 史跡案内 72 歴史勉強会 46 展示会 22 他区との交流 6
テーマ 高齢者の住みよい町づくり・健康づくり ミニコンサート 音楽祭
下福島中学校吹奏楽 松下幸之助 真言宗本願寺など

●ご感想・ご意見

松下幸之助さんの思いが何年たっても伝わっていることがすごい (同様の感想が多数)
下福島中学校吹奏楽部に感銘を受けた (多数)
講演前のビデオの音声がききとりにくかった
区役所の展示を見られたらよかった
演奏は講演の前がよい
携帯電話を切っていない人がいて、耳障りだった
質疑があることを前もって言ってほしかった

反省点

男女・年齢の項目を設けるとよかった

福島区歴史研究会 2014年下半期の事業

展示「吉野・新家・大開の今昔」7/15～11/30

(会場・図書館)



展示「池田遊子の世界—室戸台風から甦った彫刻—」 8/11～9/30

(会場・区役所)

福島区民まつり 展示・クイズなど 9/13 (会場・下福島公園)

『福島区歴史研究会会報 第3号』発刊 10月

第14回セミナー「区の花「のだふじ」の由来」講師 藤三郎氏 10/12

(会場・区民センター)

展示「上福島・福島・鷲洲の今昔」 10/15～3/31 (会場・区役所)

展示「大開で創業した松下幸之助」 11/5～11/27 (会場・区役所)

講演会「師に学ぶ 人とまちを愛する経営の心 —松下幸之助生誕120年

創業の地碑建立10周年—」 11/15 (会場・区民センター)

『創立三十周年記念誌 なにわ福島ものがたり 増補版』発刊 12月

2014年 下半期の活動記録

7/12 展示準備 (図書館)	10/16 企画会議
7/17 企画会議	11/4 区役所展示 (松下展) 作業
7/26 大阪俳句史研究会案内	11/6 講演会記念品準備
8/8 展示作業 (区役所)	11/15 講演会設営
8/20 企画会議	11/15 懇親会
9/13 区民まつり準備 (前日資材用意)	11/20 企画会議
9/18 企画会議	11/28 区役所展示 (松下展) 撤去
9/30 池田展撤去 (区役所)	12/4 図書館展示撤去
10/10 展示入れ替え (区役所)	12/4 見学会 (大日本製薬・塩野義製薬旧社屋)
10/12 「ふれあいまつり」に展示資料貸出	

★浦江塾 (協力) 7/5 9/6 10/4 11/1 12/6

ホームページ <http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm>

(会報バックナンバーも掲載)

(印刷：谷口印刷紙業)